

20111

肺静脈隔離術時の抑制帯の工夫、作成

¹心臓血管研究所付属病院

福島 洋美¹、対馬 圭子¹、大塚 崇之¹

【背景】当院は循環器専門病院であり、心臓カテーテル検査・治療や開心術を行っている。昨年度の肺静脈隔離術は224件であった。1症例の治療時間は平均2～3時間で静脈麻酔と局所麻酔を併用している。術中は無意識な体動がある為、患者の同意のもと危険防止と、画像のズレ防止の目的で抑制をしている。以前はシートで腕を包みマットに敷き込む抑制をしていたが、年齢や性別、体格の違いによって効果的な抑制が得られない現状があった。そこで、新たに抑制帯を独自で作成し使用している経過を報告する。【目的】年齢、性別、体格の違いに関わらず効果的な抑制が得られ、患者の安全安楽に繋がる抑制帯の作成【方法】大柄なスタッフの胸囲、上肢の長さ、上腕周囲を計測し、当院のカテーテル台に合うよう裁断、強度を高め且つ透視に映らないマジックテープを使用し縫製、活用する。【結果】スタッフや医師からは以前のような激しい体動は減少した印象があるという意見が聞かれた。しかし、試用開始時に神経障害を合併した症例が1例あった。【考察】神経障害を合併した症例では、左尺側指の知覚鈍麻だった。カテーテル台上の患者左側に多数ケーブルがあり、その上に抑制帯を介して上肢が置かれていた為、部分的な圧迫によるものではないかと考えられた。その後は、除圧マットの活用により同様の合併症は発生していない。体幹と上肢を抑制し且つ強度を増した事で大柄な患者にも対応し得る抑制帯となった。【結語】効果的な抑制をすることは、円滑な治療に繋がり、患者の安全安楽向上にもなり得る。